

こころの 言の葉

～第15集 親から、子から、こころから～

平成29年度「こころの言の葉」
コンクール作品集
鹿児島市教育委員会 編

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 杉元 羊一

本年度の「こころの言の葉」作品集が出来上がりました。皆様にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております、今回で十五回目を迎えました。

本事業には、面と向かっては恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生の親子の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は過去最高の一万七千二百三十五点。また、親の部の応募も六年連続千点を超え、「こころの言の葉」への関心の高さと、本事業の趣旨である、親と子の心の交流が図られていることを伺うことができました。さらに、八月にはFM鹿児島放送番組「MUSIC LUNCH BOX」で二十八年度の入賞作品が朗読され、今年度もより多くの市民の皆様に関わられる機会に恵まれたことを大変うれしく感じています。

この作品集には、中学生の子供と親が、お互いに向けて宛てた四十四編のメッセージが掲載されています。心からの感謝を素直に伝える言葉。不安で揺れる思いをぶつける言葉。遠慮がちに、自分のささやかな願いをつぶやく言葉。反抗期の自分を持ってあましながら不満と感謝の気持ちをつづける言葉。我が子の反抗期に戸惑いながらも大きな心で受け止める言葉……。一つ一つの言の葉が、読む者の心を揺さぶります。御家族皆様でこの作品集に触れ、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださった全ての皆様に関心から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

平成三十年一月

目次

「想いを伝える」言の葉

—子から親へ—

にばんめ	4
母の思い	5
ごめんねの日記	6
思春期の私と父	7
本音	8
パパへ一秒でも	9
お母さんにだけ	10
雷	11
十五年間の母への手紙	12
産んでくれてありがとう	13

「想いをつなげる」言の葉

—親から子へ—

いつのまにか	15
「送ってほしい。」	16
「いいよ。」	17
会話	18
「心遣い」は見える	19
親子で歩める時間	20
本音	21
四歳の君とケンカ	22
お古の声	23
びしょ濡れのカーネーション	24
平成二十九年年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	24
平成二十九年度「こころの言の葉」コンクール表彰式	24
審査員講評	24
編集後記	24

「想いを交える」言の葉

—子から親へ—

ひそかな頼もしいサンタクロース	26
天国の母へ	26
親からの愛情	27
何もできない方が	27
歌で通じる家族のこころ	28
母の傘	28
大丈夫、となりにいるよ	29
「知っているよ。」	29
ひとり	30
母の思いに	30
肩ぐるま	31
天使よりも鬼がいい	31
家族の絆	32

「想いを重ねる」言の葉

—親から子へ—

誕生日、おめでとう。	34
衣替えの季節になると	34
あなたに伝えたいこと	35
少し大人になった君へ	35
いざというときに	36
あなたに出会えて	36
告白	37
心優しき君へ	37
君は、親のコピーではない	38
「おかえり。」	38
お絵かき	39
平成二十九年年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	40
平成二十九年度「こころの言の葉」コンクール表彰式	41
審査員講評	42
編集後記	43

「^{おも}想いを伝える」言の葉

—子から親へ—



にばんめ

お姉ちゃんと妹の間に生まれた私。妹とけんかすると、「お姉ちゃんでしょ。」

お姉ちゃんとけんかすると、「妹らしくしなさい。」と言われる。私は何をしても何か言われるにばんめが大嫌いだ。「なんでにばんめなの。」「なんでにばんめに産んだの。」と母とけんかする。

すると、母はこう言う。

「勝手に産まれてきていて何？いいじゃない。お姉ちゃんは、お姉ちゃんしかできないし、妹は、妹しかできないのよ。にばんめはどっちでもできるじゃない。」

ああ、そうだ。にばんめは、どっちもできる。どっちもできるって、いい！

そう考えると、にばんめがちよっと好きになる。

にばんめに産んでくれて、ありがとう。



母の思い

この間、押し入れを片付けていたら母の一冊のノートのたくさんの手紙が挟まっていた。

開いてみると、私が今までに母へ贈ったものだった。母の誕生日に書いたバースデイカー

ド、母の日に書いた感謝状、サンタさんに宛てた手紙など、全て忘れられないものばかりだ。

小さい頃、母から、

「今までもらった手紙は、お母さんの宝物だから、秘密のところにしてしまっておくんだよ。」

と、言われたことがある。

こんなにも、大事にしてくれていたのかと思うと、涙が止まらなかった。もっと、たくさん書いてあげればよかったと後悔した。

直接伝えられないけれど、天国の母へ感謝の気持ちを伝えたい。

「大好きだよ、お母さん。本当にありがとう。」

ごめんねの日記

私の母は、仕事で忙しい。土日だって、私にかまってくれず、弟のサッカーへ行ってしまう。それが悔しくて、弟に当たってしまうのだ。それでも母は、笑顔で弟をなぐさめる。弟ばかり。私のことなんて好きじゃない。自分の勝手な思い込みで毎日を過ごしていた。そんなとき、母が書いた日記を見つけた。パラパラとめくると、私が三歳のときから、今までのたくさんの思い出が書いてあった。そして、一番最後のページ。「ごめんね。怜奈。仕事、頑張るから許してね。寂しい思いをさせてごめんね。」

と、書いてあった。小さい字を見るたびに涙が出そうになった。私は、母から愛されていた。ごめんね、お母さん。私に笑顔をありがとう。



思春期の私と父

私は家族LOVEだ。かわいい弟はもちろんのこと、厳しくも優しい母も大好きだ。そして、特に大好きなのは父だ。父はとても優しく、おもしろい。友達に、

「あなたのお父さんはやさしくていいなあ。」
と、言われるたびにうれしくなる。自慢の父なのだ。

そんな父は、私が学校から帰っているときに、こっそり隠れて道で私を待っていることがある。父を見付けると、とてもうれしくて父のもとに走り出したくなるが、そんな姿を同級生や先輩に見られるのは恥ずかしいので、周りに誰もいないことを確認してから大きく手を振りながら父のもとへ走る。二人で一緒に帰るのはとても幸せだ。夜遅くまで勉強している私を寝ないで待っていてくれる父に私は感謝している。大好きだよ。

本音

学校に行くとき、私は片手に日傘を持ち、パーカーを着る。遊びに行くときだって、長ズボンは欠かせない。私は日光に当たることのできない難病をもっている。私は一生薬を飲み続けられないといけない。薬には副作用もあり、顔はふくれ、真っ赤になる。正直、こんな生活うんざりだ。病気になる前の自分に戻りたい。でも、そんなことを口に出したところで何も変わることはない。だから、誰にも言ったことはない。それなのに、母には何でもお見通し。母は私に、

「こんな体にしてゴメンね。」

と、謝ってくる。でも、お母さん。私は自分がかわいそうな子と思ったことはないよ。だって私には、友達がいる。とっても幸せ者。ただ少し前の自分に戻りたいだけ。だから、もう謝らないでね。私、自分の手で幸せをつかめる人になるから。

パパへ一秒でも

いつも単身赴任で仕事を頑張ってくれてありがとう。私たちは大丈夫なので安心して。

でも、私、最近気付いたことがあって、私とパパの会話はいつも思ひ出話だなあって思う。

「あのときのこと、覚えている？」

きっと私たちは、ママが星になってしまった瞬間から、一秒も時が進んでいないと思う。だから、ママも見守ってくれているし、

「一秒でも時を進めませんか？」



お母さんにだけ……。

私は反抗してしまう。お母さんにだけ反抗してしまう。お母さんのふとした一言ですごくイライラしてしまい、「だまって。」や「うるさい。」や「うざい。」と、つい言ってしまう。そこからは、何の会話もなく、私は自分の部屋で、ただ、ただ後悔する。

『謝る』、その気持ちが心にあっても、なかなか勇気が出ない。そして、謝れずに次の朝が来てしまう。お母さんをさらに困らせてしまう。

だけど、だけど、本当はけんかなんかしたくない。いつもいつもイライラする自分に腹が立つ。お母さんに謝りたい。でも謝れない。

お母さん、今の気持ちを伝えます。

「ごめんなさい。ありがとう。そして、大好き。」



雷

雨の日の雷は怖いけれども、お母さんの雷はもっと怖いです。

雨の日の雷は突然落ちますが、お母さんの雷はなんとなく予想ができます。

たいてい、光ってから音の鳴る雷。

お母さんの場合は、怖い顔と一緒に落ちます。

そんなお母さんの雷ですが、自然の雷と違うところがあります。

自然の雷は怖い。けれども、母の雷には愛があります。

愛の雷になら、打たれてもいいかも。

心がしびれない程度に、落としてください。



十五年間の母への手紙

この前、母にお金を貸してもらおうと思い、母の財布を見てみたら、小さい紙切れがたくさん入っていました。何だろうと見てみたら、「いつもありがとう。」や「早く元気になってね。」などの過去の十五年間の母への手紙でした。保育園のときや小学校低学年の頃の私が書いた手紙は、字がきたなくて、書いている言葉も少なくなくて、おまけに下手な絵がたくさん描いてある手紙でした。こんな手紙をずっと財布の中に入れて持ち歩いていてくれたと思うと、とても感動しました。これからも財布からあふれるくらいの手紙を母に贈り続けたいです。



産んでくれてありがとう

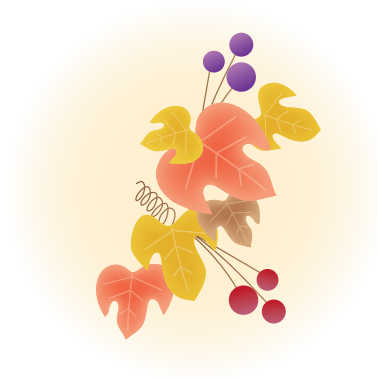
「あなたは奇跡の子だよ。」

お母さんは今年の誕生日に言ってくれたよね。お母さんのおなかの中で医者に死んでいると言われた私。初めての子どもが自分のお腹の中で死んでいると言われたお母さん。私を助けるかお母さんを助けるかを選んだお父さん。今となっては十三年も昔のことだけれど、産まれたときは「奇跡だ。」って喜んでくれたんでしょ。産まれた時はとても小さかった私も大きすぎるお母さんとお父さんの愛情で、こんなに大きくなりました。いつもは、「早く宿題しなさい。」とか「うるさい。」とかけんかしているけれど、本当は大好きです。こんなにワガママでうるさくて、お母さんなしじゃなんにもできない私だけれど、今、言葉で感謝の気持ちを伝えます。

「産んでくれてありがとう。」

「^{おも}想いをつなげる」言の葉

— 親から子へ —



いつの間にか……。

久しぶりに、あなたと手をつないだ。

もう同じぐらい。あなたと私の手。

妹たちに占領されていた私の手。

妹たちを守ってくれていたあなたの手。

いつの間にか、大きくなっていったんだね。

久しぶりにつないだあなたの手の温もり。

あなたの成長を感じた。

いつの間にか、頼もしい存在になっていたんだね。



「送ってほしい。」

娘からたまに出るこの言葉はきつい。学校からは送迎しないでとお願いされているのを、知っているくせに。

雨の日や、荷物がいっぱいときはさらに心が動かされる。

「他の子は送ってもらえるのに、私だけ送ってくれないの？」

いやいや、ほかのお子さんも送ってもらっていないと思うよ。

こんな葛藤をみんな抱えていると思う。

甘やかすのは簡単だが、突き放すのは大変だ。

でも、いつも一番応援しているから、今日も送らない。

「頑張ってるね。」

頑張っているのを知っているけれど、今日もこの言葉で送り出す。



「いいよ。」

四月から父と子、二人の生活になりました。

慣れない家事でとまどう私に、君は「いいよ。」と言います。

その「いいよ。」は、「しょうがない、我慢するから。」の「いいよ。」なのか、
「頑張っているね、ありがとう。」の意味を込めての「いいよ。」なのか、

表情や態度でなんとなく分かります。

前者のときは、まだまだ修業が足りないと思い、
後者のときは、修業が実を結んだと思っています。

さて、今日はどっちの「いいよ。」かな。

お父さんは、どっちでも、「いいよ。」



会 話

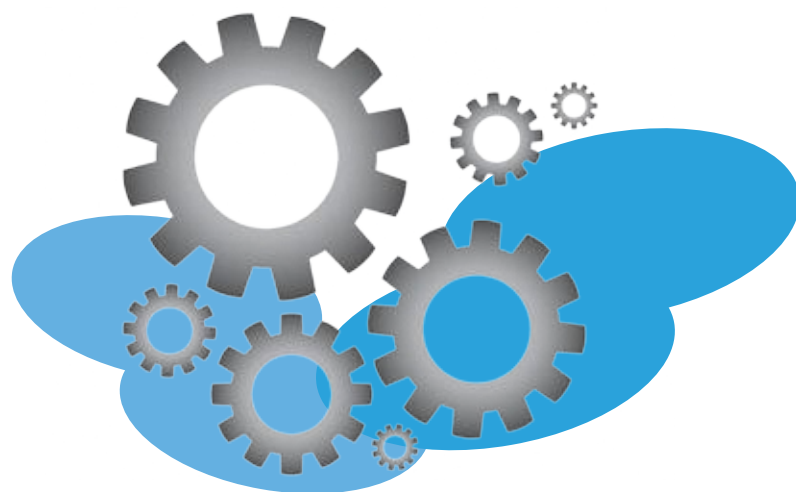
親は、先を見て話をする。

子は、今を見て話をする。

今は、かみ合わないね。

いつか、少しずつ、その距離が縮まるといいね。

見ている方向は、一緒なんだけれどね。



「心遣い」は見える

あれは、息子が小学一年生になった春、電車通学する息子が心配で、一緒に登下校した。

一か月を過ぎる頃、息子が、

「お母さん、もう大丈夫だよ。」と言ってきた。

「分かった。もう一人で帰って来られるのね。」と言ったが、

気になって家の外で息子の帰りを待った。

しばらくすると、自分の体より大きめのランドセルと、右手には野花を持って帰ってきた。

「はい、お母さん。」と満面の笑顔で花を渡してくれた。それは、毎日、何年も続いた。両

手に持って帰ってくる日もあった。息子の心遣いと優しい思いやりの気持ちが嬉しく、頼も

しくも思えた。いつもありがとう。

親子で歩める時間

私は小二のときに母を病気で失った。

そして私は母となり、同じ年であなたを授かった。

もしかしたら、私もあなたが小二のときに亡くなるかもしれないと思った。

だから、あなたが小二になるまでに、一人で何でもできる子に育てなければと、時には厳しく育てた氣もします。

小学校に入学する頃には、すべて自分のことを一人でできる子供に成長してくれました。安心できたことを覚えています。

そして、今、私が母と過ごせなかった時を、もう七年過ごさせています。

あなたの成長を見ているだけで、とても嬉しい日々。

「思春期なんだけど。」と時々怒った態度をとるあなた。

そんなあなたを見るのも嬉しくて。いつも笑ってごめんね。

大きな夢に向かってコツコツと進んでいるあなた。

私は、その背中をそっと支えてあげることしかできないけれど、全力で応援しますね。

本音

彼が試合で活躍した日に限って、私はその場にいらなくて、

『母がいないと活躍できる』

と、寂しいジंकクスまでできる始末。

その日も私は観戦できず、そして、いつも以上の大活躍。

みんなにいっぱいほめてもらってご満悦で帰ってきた。

「やっぱり、ママがいないと、いいプレーができるんだ。」

うれしそうに自分の勇姿を語る彼。

でも、私は聞いてしまったのだ。実は、他の母親たちに、

「今度はママの前で活躍したいな。見てくれるかな。」

と、話していたことを。

ごめんね。次こそ絶対見るからね。

そして一緒に、最高のハイタッチをしようね。



四歳の君とケンカ

肩に置いた手を払われ、「私にさわらないで。」

三十五年の人生で一番傷付いたよ。

自分でもビックリするぐらい。

十分後、何事もなかったように話しかけてくる君。

少しいじけている僕。

でもね、君の笑顔にはかなわない。

今でもだけど、きっとこれから先も

君の笑顔にはかなわないと思う。

でもね、それでいいと思うんだ。



お古の声

小さくなった衣服を整理していると、

幼いあなたが 笑いかけてくる。

一つ一つの風景を思い、懐かしく愛しみ、

なかなか作業が進まない。

思い切って処分しようと、意を決してごみ袋に入れても、

「誰か着てくれないかしら……。」と、また取り出すことを繰り返す。

いただくお古に込められている、それぞれの母の愛。



びしよ濡れのカーネーション

母の日の日曜日、朝から友達と野球に出かけた君。もう中学生だもんね……。

夕方、突然の雨。自転車だけど大丈夫かな。

玄関のチャイムが鳴り扉を開けると、びしよ濡れの腕がすっと差し出したのは、水滴のたくさんついたカーネーションの花束。

はにかんだ笑顔と、濡れた赤い花。

最高の母の日になりました。



「^{おも}想いを交える」言の葉

—子から親へ—



ひそかな頼もしいサンタクロース

私がサンタクロースの正体を知ったのは、やっと四年生のときでした。四年生のある十二月の夜、私はサンタクロースを目の前で見ようとしました。時刻は十二時半。睡魔に襲われるも、頑張って腰を上げてずっと家中を眺めていました。二段ベッドの上の方に寝ていた私は、ついに目を閉じて落ちてしまいました。

目を開けると、真っ青になったサンタのコスプレをしたお父さんが、私を抱っこしていました。私が寝るまでずっと起きていてくれたんだ……。

どんなサンタにも負けない、強いサンタクロースが今でも私たち家族のために働いてくれています。

天国の母へ

私は、後悔しています。

ついこの前まで、一緒に笑って泣いて、はしゃいでいた母が亡くなりました。私は「もっと甘えればよかった。」と後悔しています。母は最期、私と妹に「愛しているよ。」と言いました。私は母に「私も愛しているよ。」と言えませんでした。言いたいことも、一緒にしたいことも、もうできなくなりました。もっと甘えて、もっと言うことを聞いて、もっと遊んで、もっと、もっと……。私の心には「後悔」という名の雪が降り積もるばかりで、その雪は解けません。

私は、母に手を合わせるとき、いつも最初に言うことがあります。それは、「ありがとうございます。ごめんなさい。大好きだよ。」です。私は、これからも言い続けます。天国にいる母に届くように。

親からの愛情

お母さん。覚えていますか。

私が、小学三年生の頃におじいちゃんが病気で亡くなったときに、お母さんがおじいちゃんの顔を手で包むようにしてさわったことを……。

私は、ずっと覚えていました。あの頃は、お母さんを見て、「何してたんだろう……。」とっていました。でも、今思うとおじいちゃんがお母さんを愛情いっぱい育てていたから、お母さんからの感謝の気持ち表れた姿だったのかもしれない。

私もあのお母さんのように言葉で言えなくても、何か行動で示せるような感謝の気持ちを送りたいと思います。

何もできない方が……。

「何もかも自分でできてえらいね。」

ほめ言葉のようだが、私にとってこの言葉が一番辛い。私には、一つ上のスポーツだけが取り柄の兄と、四つ離れた妹がいる。そのため、母はいつもこの二人に付きっきりで、料理、掃除、アイロン掛けと何でもできてしまう私はほったらかし。私だって、もっと母に甘えたい。もっと私のことも見てほしい。そう思うと何もかもできてしまう自分が憎い。いつそのこと何もできない方が……。

お母さん、私はもう中三だけれど……たまには甘えたいときだってあるんだ。子供が三人もいて大変なのは分かるけれど、もう少しだけ私のことも見てほしい。気にかけてほしい。ワガママでごめんね。

歌で通じる家族のころ

「ラーラーラー♪」

僕が歌を歌い出すと、母も一緒に歌い出します。すると、父も一緒に歌い出します。

僕は、毎日のように始まる、この合唱の時間が大好きです。しかし、音程を外しながらも、自信をもって歌う父がいるので、笑いの時間に変わります。そんな時、父へ、僕と母とで歌の特訓をします。

家族の笑顔がたくさん咲くこの時間が、当たり前になっていますが、僕にとって大好きな時間です。母は言います。

「幸せな時間だね。」と。

こころが通じ合えるって、素敵だな。

母の傘

「学校行きたくない。」と 言ったあの日

あなたはそれを 静かに受け入れてくれた

部屋にこもり 「明日こそ。」と葛藤する僕を

あなたはそっと 支えてくれた

悲しみの雨で びしょ濡れになりながら

それでも立ち向かった 僕の過去を

「無駄じゃなかった。」と 認めてくれた

ふわふわのタオルで 包んでくれた

今も雨は やまないけれど

僕は大丈夫 歩けるよ

あなたがくれた 傘があるから

勇気と自信の 傘があるから



大丈夫、となりにいるよ

父が亡くなって、今年で九年。まだ小さかった私は、まだよく分かっていなかったけれど……。

お母さん、あなたの気持ちは、どうだったのだろう。今では、いつも明るく、笑わせてくれるけれど、あのときは、あのときばかりは、たくさん泣いたのかな。

正直、父との思い出は、あまりないけれど、お母さん、あなたのおかげで、笑えるんだよ。あなたが父と出会ったことで、今の私がいるんだよ。だから、大丈夫。心配する必要なんてない。

遠い空の下、父はきっと、となりにいるから。

「知っているよ。」

お母さんがいつも私たちのために毎日朝早く仕事に行っていること、「知っているよ。」

私が辛い顔をしているときは黙って心配してくれていること、「知っているよ。」

私と少しだけもめたとき、隠れて泣いていること、「知っているよ。」

お母さんは、気付いていないと思っっているけれど、私はいくつものお母さんの優しいウソを、「知っているよ。」

私は、そんなお母さんが大好きでお母さんも私のことを愛していることを、「知っているよ。」

どんなに疲れていても笑顔で家に帰ってきてくれていること、「知っているよ。」

逆にお母さんに聞きたいんだ。

お母さんは、私が将来こんなにステキで優しいあなたみたいな人になりたいって思っていること、知っている？

きっとお母さんは、「知っているよ。」って言うんだろうなあ。

だって、お母さんは私のこと何でも、「知っている」でしょ？

ひとり

中二の頃、思ったことがある。ひとりで生きてみたいって。ひとり暮らしをして、ひとりで生きる、そんなことに憧れている自分がいた。今は、そのときの自分はバカだったと思う。

部活で疲れて帰ってきて、ドアに鍵がかかっていたら、しゅんとなる自分がある。「ただいま。」に「おかえり。」がなかったら、しゅんとなる自分がある。だから、最近は、少し遅めに帰っている自分がある。母や父、姉たちが先に帰っていることを願い、ゆっくり歩く。家に明かりがついていたり、ご飯のおいがしてきたり、それを嬉しく感じている。この幸せは、ひとりでは感じることはない。ひとりであるよりも、家族といるときのこの幸せをかみしめていたい。こんなことを考えていることは、家族には秘密にしておこうと思う。

母の思いに

お母さんが幸せだと思うときは、私が笑っているときなんだって。

お母さんが嬉しいと思うときは、私が頑張っている姿を見るときなんだって。

お母さんが辛いと思うときは、私が一人で悩み苦しんでいるときなんだって。

そしてお母さんの願いは、私が幸せになることなんだって。

お母さんの思いは、「私」でいっぱい。

だから、私はお母さんの思いに応えたい。

大好きなお母さんがいつまでも幸せで、そして笑顔でいられるように精一杯応えていきたい。

肩ぐるま

小さいころのアルバムに、私を肩ぐるましているお父さんとの写真があった。とてもきれいな笑顔だった。

最近、お父さんは兄にかかりきりだ。野球部の寮に入った兄の心配ばかり。ちゃんとお腹いっぱい食べているかな。ぐっすり眠れているかな。夜ご飯のときも、お風呂あがりも、いつもそんな話ばかりだ。

私のことは心配じゃないのかな。もちろん、兄のことを心配するお父さんの気持ちも分かる。私だって心配だ。でも、私の話も聞いてほしい。私だっていっぱい話したいことがある。

ねえパパ、肩ぐるましてよ。

天使よりも鬼がいい

いつもあまりほめてはくれないけれど、それがぼくの母だ。それには、わけがあるということも最近知った。いやに思うこともあるけれど、わけがあると知ってうれしかった。そんな母に、言いたいことがある。

天使より、少しきびしい 鬼がいい

いつもいろいろ言ってくれてありがとう。



家族の絆

私には、お父さんがいません。私が五歳のときにガンで亡くなりました。私とお父さんの時間は、たった五年で止まってしまいました。そのときの記憶は私にはあまりありません。

けれど、アルバムの中の父は、優しい笑顔で私の家族を照らしてくれていました。

母は、強く優しい、私の理想の女性です。私は、母の涙を一度しか見たことがありません。父が亡くなったとき。その一回だけです。そのときは、私も母も大声をあげて泣いたのを今でもはっきり覚えています。

父が亡くなったことをかわいそうだと思う人もいるかもしれません。けれど、父の死によって家族の絆が深まったと私は思っています。

お母さんいつも本当にありがとう。



「^{おも}想いを重ねる」言の葉

— 親から子へ —



誕生日、おめでとう。

生まれてくる前は、ただ元気に生まれてきてくれることだけを願っていたのに。

いつの間にか、元気なことだけでは足りなくなつて、もっと優しく、もっと強く、もっと賢くと、ずいぶんとたくさんの「期待」というわがママを、押し付けてきたのかもしれないね。

そんな自分を、少し反省する日なのかもしれないね。

誕生日、おめでとう。

生まれてきてくれて、ありがとう。



衣替えの季節になると……。

「お母さん、『子ども替え、しなきゃ。』って
言わないで。」

衣替えの季節になると思い出す言葉。あなたが小一の時、真面目な顔で話してきたよね。今では、『衣替え』を『子ども替え』と聞き間違えたという笑い話になって、忘れちゃったかもしれないけれど、実は本当に心配していたよね。

ごめんね。

「ボク、思春期だよ。察してよ。」

あの時みたいに、思っていることを何でも話してくれると、母はうれしいんだけど。いくつになっても、私のかわいい子なのだから。

あなたに伝えたいこと

わずか生後六か月で父親を亡くしたあなた。父親の記憶なんて全くないのは寂しいことでしょう。お母さんはあなたにとって母親であり父親でもある。そう思って接しています。厳しいだろうけれど、そこはご勘弁を。あなたは本当に父親に似ています。仕草や雰囲気まで似てしまうのはとても不思議です。あなたの大半は父親譲り。あなたの中でお父さんは生き続けているのだと思います。そう思わずにはいられないの。あなたの父親は、私が世界で一番尊敬できる人でした。物腰が柔らかく、思慮深く、堅実で安心感のある人でした。だからね、何が言いたいかというと、自分に自信をもってほしい。目指す道、目標を成し遂げられる能力を父親から譲り受けていると信じて頑張っしてほしい。私は信じています。

これからは、迷いなく夢に向かって前進してください。お父さんの分まで二倍充実した人生にしていこうね。

少し大人になった君へ

家から学校まで歩いて十分ほどの道のりを、ある日、二時間かけて歩いたね。途中、「帰る？」と聞く私に、無言で首を横に振ったよね。かたつむりとどっちが速いかな？と話しても、あなたの表情は硬く、ランドセルだけではなく、他にも重たい何かを背負っているように見えました。

やっと、学校に着いても、正門を超える一歩が踏み出せない日々。

「甘えてるだけでしょ！勉強したくないんでしょ！」

と、泣きながら怒鳴る私に、何も言い返さず、ただ、じっと聞いていたね。二人でたくさん泣いたね。ごめんね、ごめんね。一番辛くて苦しかったのはあなただったよね。伝えたくても、どんな言葉で表せばいいのか解らなかったあなたは、あの頃より少し大人になって、あのときの気持ちを時々話してくれる。

これからも、あなたの心に寄り添う一番の方法だよ。忘れないでね。

いざというときに……。

大きな地震があった夜、怖がっていたあなたと久しぶりに同じ布団で一緒に寝ました。隣でスヤスヤ眠る横顔を眺めながら、小さい頃のあなたを思い出し、涙が出てきて、私はしばらく眠れませんでした。

子供の成長と共に、親は、してやれることがだんだん少なくなっていくのですが……。

いざというときには、あなたを助けてあげられる、支えてあげられる、守ってあげられる、安心してあげられる、信じてあげられる、そんな母でありたいです。



あなたに出会えて

学生時代、先生を信用していなくて、学校が大嫌いだったお父さんが、あなたが生まれてきてくれて、学校の先生と関わりをもつことができた。想像していたより学校は、すごく楽しくて、先生は一生懸命だった。

あなたの卒業式。お祝いの言葉を読むとき、涙をこらえるのが精一杯だった。何よりもこの年齢になって心から尊敬できる先生に出会うことができた。お父さんの人生をより輝かしいものにしてくれたあなたに心から感謝しています。お父さんをお父さんを選んでくれてありがとう。

告白

私たちは、あなたと逢うまでに何度も流産を経験しました。繰り返す流産に悲しい思いをし、この手に、赤ちゃんを抱くことはないだろうと、覚悟を決めました。

そのため、あなたを授かったときの喜びは、とても表すことができないくらい大きくて、幸せでした。あなたが無事に産まれてくるまで入院し、

「この命を守らねば！」と、必死でした。

そして、あなたは、多くの人に祝福されて産まれたのです。だから、自分を大切に、人を大事にしてください。

心優しき君へ

忘れてほしいな。

幼い頃、しかったことを……。

負けず嫌いの君が、悔しくて泣き叫んだ日、そんな君を見たくなくて

思わず、手をあげてしまった。

ごめんね。

負けず嫌いは変わらないけれど、強くなって優しくなって、争いごとも嫌う君。

いつも穏やかな日ありがとう。

いつまでも、私の優しい息子でいてください。

母より



きみは、親のコピーではない

家で同じように生活しているから
同性の親子は似るよね。
昔、自分も感じたように。

相田みつをの詩にある

「わるいところが 親に似た

わるいところが 親ゆずり

わるいところが おれそっくり

いやなところが おれそっくり」

でも、思うのです

きみは、私ではない。

自分を愛して、らしく生きなさい。

「おかえり。」

今、駅前に車を止め、もうすぐ電車から降りてく
る君を待っている。

毎晩、夜遅くまで図書館や塾で勉強して大変だと
思うが、一応、受験生なのだから頑張りなさい。

正直、駅までの迎えはお父さんも大変だ。本当は
ビールでも飲みながらゆっくりテレビでも見ていた
い。

一方で、君を車に乗せて家まで運転する時間は、
お父さんにとって、とても大事で大切にしている時
間でもある。

君が助手席に座ったら、楽しかったり面白かった
りした出来事をたくさん話してくれるから、黙って
運転。

後部座席に座ったら、話しかけたくなるのをぐっ
と我慢して、黙って運転。

今日は、どちらに座るのかな。

暗闇の向こうから女の子が走ってきた。小さい頃
から変わらないペンギン走りで、すぐにわかるよ。

さて、君が好きな曲をかけておくか。少しは元氣
が出るといいな。

「おかえり。」

お絵かき

中学校最後の日曜参観は美術。絵なんて描けない。描きたくないと思っていました。

でも、何年ぶりでしょう。

並んで座って、一緒に絵を描くなんて。

小さいとき、一緒にお絵かきして笑いましたね。

楽しい記憶を思い出させてくれた担任に感謝。
嫌がらずに隣で描いてくれたあなたに感謝。



平成 29 年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧

応募総数 17,335 点 (中学生 15,351 点 親 1,984 点)

賞	中学生の部	賞	親の部
大 賞	加 藤 碧	大 賞	田 中 千 夏
準大賞	本 田 愛 理	準大賞	寶 來 典 恵
準大賞	渡 邊 真 愛	準大賞	山 下 哲 也
優 秀 賞	川 井 希 望	優 秀 賞	今 村 正 美
優 秀 賞	五反田 優 花	優 秀 賞	亀之園 敦 子
優 秀 賞	川 上 莉 奈	優 秀 賞	田 中 真 紀
優 秀 賞	永 里 光	優 秀 賞	重 信 里 美
優 秀 賞	木 原 由 貴	優 秀 賞	高 崎 菜穂美
優 秀 賞	遠 藤 真 桜	優 秀 賞	田 島 佳 代
優 秀 賞	中 野 怜 奈	優 秀 賞	前 迫 直 子
入 選	高 尾 成 美	入 選	浅 間 花 美
入 選	田 村 幸 子	入 選	奥 田 由加里
入 選	市 来 碧	入 選	山 崎 智 子
入 選	松 本 和 未	入 選	間 浦 斎 孝
入 選	濱 川 凜 音	入 選	森 隆
入 選	向 井 伸 吾	入 選	仮 屋 美知代
入 選	山 口 真 由	入 選	二反田 とも子
入 選	吉 野 妃 南	入 選	枝 元 直 美
入 選	内 野 江 理	入 選	藤 崎 紀 彦
入 選	東 玲 良	入 選	梶 原 剛
入 選	河 野 涼 花	入 選	大 山 悦 子
入 選	上 松 航		
入 選	上 原 菜 月		
団体特別賞 鹿児島玉龍中学校			

平成 29 年度「こころの言の葉」コンクール 表彰式

～平成 29 年 10 月 21 日（土） 市民文化ホール 第 2 ホール～



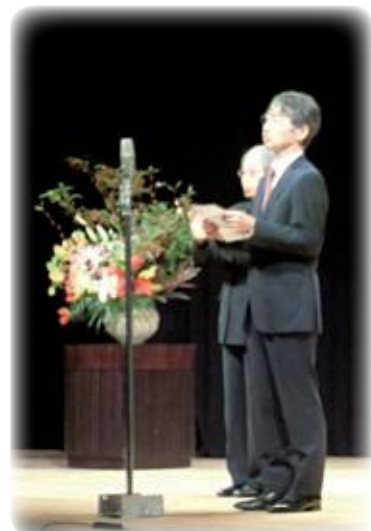
杉元教育長より
表彰状の授与



鹿児島玉龍高校放送部の
生徒による作品朗読



受賞者インタビュー



審査委員長講評

審査員講評

審査委員長 上谷 順三郎 先生

「こころの言の葉」コンクールは今年で十五回目となりました。今の中学生の皆さんが、生まれた時から続いているコンクールということになります。

こんなに長く続いている理由は、コンクールに参加した皆さんは実感していると思いますが、このコンクールに参加すると特別な、心あたたまるコミュニケーションができるからです。

手紙を書くということをふだんの私たちはほとんどしません。中学生の時に親子で手紙を書くということとはまずありませんね。家族がお互いを意識して自分の気持ちを言葉にするこの手紙のやり取りは、本当に特別なことです。

そういった特別なコミュニケーションの場合、このコンクールをきっかけに生まれています。作品集を読んだ人にもその特別な感じは伝わって、コンクールに参加していない人にとっても自分のことを振り返る特別な体験となつていると思えます。

言葉にするからわかる、気付く、そんな素直な心が手紙には表れています。今回は特に題名をつけてもらいましたが、そうすることで何を伝えたいのかがよりはっきりした文章が多くなつたと思います。

どうぞこれからも、たまには家族に手紙を書いて、口では言えない思いを文字で表してみてください。

鹿児島大学教授

大浦 慶子 先生

今年もたくさん作品が寄せられました。どの作品からも、それぞれの思いが、言の葉となって、胸の奥深くに入り込んでいきます。何気ない日常の日々に、こんなに幸せが詰まっているんだよと、語りかけてくるようです。

子供たちの中には、思春期の中で自分の道を探しあぐねている子供たちもいます。市内の学校を訪問すると、真に、子供のことを思い、子供のよりよい成長を願っている保護者の方々や先生方に出会えます。子供たちも、とても純真で、内に秘めた可能性を感じます。子供たちに寄り添って、「もっと、自分のことを知ったら、自分のよさに気付いたら、もっと前向きになれるのに……」

前向きになつたら、自分の夢が見付かるのに……。夢はあるのではなく、見付け、育てていくものだと、自分で気付けるのに……。悶々としている心の内をさらけ出していいんだよ、大人を信じて相談していいんだよ。」

と、呼びかけたくなります。

「こころの言の葉」作品集には、情愛を感じます。日々、多忙な一日の中で、大人も子供も短い時間でいいので、自分の心と向き合う時間をもつと、自分がどんなに愛されている存在か、幸せな時間を過ごしているのか、気付くことができます。困ったときや悩んだとき、相談に乗ってくれる大人がいることも忘れないでほしい。

今年の「こころの言の葉」作品集も是非、読んでください。

市教育委員会スクールカウンセラー

遠藤 陽子 先生

毎年審査をするたびに思います。「私は家族の存在が当たり前になっていなくなつたらどうするか。」と。

この「こころの言の葉」は、思春期を迎えた子供と、戸惑いながらも懸命に向き合う親が文字を通して普段言えない思いを伝え合う場です。

子供たちの文章は、家族のことを大切に想う気持ちに溢れている一方で、素直になれない自分に苛立ち困惑する姿が印象的でした。そして、そんな多感な時期の我が子を、全身で受け止めようとする親の姿もまた、胸を打つものがありました。

「今は分からなくてもきつといつか分かつてくれる。」随所に見られる親の思いは、今も昔も変わらない普遍的な愛でした。さらに、子供の言動から親のあるべき姿を学ぶ作品も多く、決して完璧ではない親の弱さを感じさせる文面には、試行錯誤しながら子育てしている苦悩と喜びに満ちた等身大の親の姿がありました。

この「こころの言の葉」コンクールに応募された方々は、相手を思いながらペンを握る、その時間が何よりも尊く、また今まで気付かなかつた本心に触れた瞬間だったのでないでしょうか。この作品集には様々な家族の形があります。子と親の想いに触れて、御自身の家族と重ねると、今まで以上に愛おしく、かけがえのない存在だと再認識することでしょう。この作品集を通して、決して当たり前ではない家族の姿を見つめていただけたらと思います。

フリーアナウンサー

隈元 浩二郎 先生

親子の関わりには特段のモデルがあったり、こうあるべきだという不文律が存在したりするわけではありません。おそらくは家族の数だけ、相互の関わり方は生じてくるのでしょう。とりわけ、今回は親子が相互の内面を思いやる姿や言葉が光りました。「ありがとう」、「ごめんね」、「がんばってね。」などの感謝や謝罪、激励といった言葉たちが、素直にキャッチボールされていました。そんな言葉の魅力は、いつしか審査していることも忘れさせ、家族の世界へと誘ってくれました。

そもそも親子関係とは、時としてわがままな態度をとったり、相手を傷付けてしまう言葉を口にしたりのことがあります。それでも、感謝や謝罪、激励などのたわいのない一言が、その課題を解決したり、難局を乗り越えさせたりしてくれます。翌日には何事もなかったかのように、笑顔を交わすことができるのも、親子であればこそなのでしょう。

そんな阿吽（あうん）の呼吸のような魔法の言葉が、今回の「こころの言の葉」作品集には満載です。ぜひこれらの言葉を参考にしてください、新たな家族の姿を形成してみてください。実にシンブルな言葉ばかりですが、心涙する表現には圧倒されることでしょう。そのたわいもない言葉の裏側には、親子相互の内面を思いやる心情が無限に広がっています。どうぞそんな親子の「こころの言の葉」を御堪能いただき、実践につなげていただければ幸いです。

元中学校校長

牧 眞弘 先生

はじめに、第十五回「こころの言の葉」コンクール審査にあたり、御応募いただきましたすべての方に感謝を申し上げます。今年も、一点一点の作品を読ませていただく中で、背景などが目に浮かび、二回三回と読むうちに心を打たれ、自然と涙が溢れる作品もございました。

普段では気付かない、日常の幸せが当たり前になりすぎて、私も子育ての中で、あのととき、このような言葉をかければよかった、など後悔の連続です。

生まれてきてくれて「ありがとう。」なのに、我が子を愛するがゆえに、ときにはつい余計なことまで、必要以上に言葉をぶつけてしまうこともありました。

第一回「こころの言の葉」コンクール当時の我が子は、まだ幼稚園生と生まれたばかり。あれから十五年が過ぎ、子供が刻々と成長していくように、「こころの言の葉」も少しずつその輪を広げ、昨年度からはFMラジオでも作品が放送され、とても好評を博しています。

変わらないのは、我が子を愛する想い。親を、家族を愛する想い。

足りないのは、ほんの少しの感謝の気持ちや言葉だけ。

親にとって、愛する我が子はいくつになっても大切な子供。こころの言の葉コンクール審査を終えて、今度は私の想いを自分の言葉に代えて、いくつになっても子供たちに伝えていきたいです。

市PTA連合会会長

編集後記

関係の皆様御尽力により、「こころの言の葉」コンクール作品集第十五集が完成しました。過去最高の応募数は、各中学校での取組の成果と感謝申し上げます。特に親の部の応募が六年連続で千点を超えたことは、所期の目的である「中学生とその親の心の交流」にとって、大きな意義があると思います。

今回、保護者からの応募作品を確認していたところ、お手紙付きの作品を見付けました。父親の書いた言の葉に対して、母親が次のような手紙を付けていたのです。

「今年は、娘が中三で最後の応募なので、卒業前の思い出として、主人がメッセージを書くよう夫婦で約束していました。文章が苦手な主人は何度も下書きを書いては消し、書いては消し……。

結局、清書は私でしたが、主人らしい文章にクスツと笑ってしまいました。娘との中学校生活最後の素敵な思い出になるといいなあと思っています。（中略）こんな機会でもなければ、父親が娘にメッセージを書くこともないので、「こころの言の葉」に感謝しています。ありがとうございました。今年が最後の応募になりますが、今後の後輩の方々の作品集もずっと楽しみにしています。

「今年で最後……。」同じような思いで、言の葉を綴られた方も、きつといらつしやることでしょう。一年一年積み重なる思いを言の葉に込めて応募してください。心から感謝いたします。

本年度の団体特別賞は、鹿児島玉龍中学校が受賞しました。生徒の入賞作品数や、保護者作品数の増加が評価されての受賞です。それぞれの学校での取組が、このコンクールを支えてくださっています。

来年度も、ますます親子の心の交流が図られるよう取り組んでまいります。更に多くの素晴らしい言の葉が寄せられることを心からお待ちしています。

こころの言の葉

～第15集 親から、子から、こころから～

平成30年1月31日

発行 鹿児島市教育委員会

〒892-0816 鹿児島市山下町6-1

TEL (099)227-1941 FAX (099)227-3016

表紙写真 福元 徹 撮影

